「聖霊の証印」（エフェソ一章三～一四節）

1　聖霊降臨

今日の日曜日は「聖霊降臨祭」です。クリスマス、イースターと並んで、教会の大切な祝祭日です。

聖霊降臨、聖霊が降（くだ）ったというのは、イエス・キリストが天に昇り、地上を去って十日たって起こった出来事を指していうものです。新約聖書の使徒言行録第二章に書いてあります。

場所はエルサレム市内です。イエスの昇天を見送った弟子たち――使徒と呼ばれた人たち――、彼らをふくむ百数十人の信徒（使徒一・一六）が、一つになって集まっていたときです。聖霊が降り、彼らは聖霊に満たされます。そしてその霊が語らせるままに、いろんな国の言葉で、福音を語りはじめた、イエスをメシアとして、救い主として証ししはじめたというのです。この出来事が聖霊降臨と呼ばれます。そしてそれを毎年記念する、お祝いする、これが聖霊降臨祭です。世界の教会は、今日までこれを大切にしてきました。

聖霊降臨祭はペンテコステとも呼ばれます。数字の五十がペンテコスタです。ペンテコステは、五十番目、五十日目の意味です。ユダヤで過越祭から数えて五十日目に行われる祭り（小麦の収穫祭）、それが「五旬祭」です。聖書は「五旬祭の日」に聖霊が降ったとしているので（使徒二・一）、教会は、聖霊降臨日、聖霊降臨祭をペンテコステと呼ぶようになったわけです。

この出来事、まことに不思議な、しかし少し見方を変えれば、まことに希望と喜びに満ちた出来事ですけれど、何の予告も、何の前触れもなしに起こったのではありませんでした。

この出来事の一〇日前、つまりイエスがいよいよ天に昇る、地上を去る日です。イエスはこう言い残しています。

> あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる（使徒一・八）。

ここでイエスが予告したように、使徒たちは、その日、聖霊の力を受けて、主の証人として力強く出発したのです。

しかし聖霊降臨のことはイエスに遡るだけではありません。じつはもっと長い時間の物差しで受けとめられ、理解されるべき出来事です。預言者にまで遡ります。預言者までということは、旧約の心臓部に遡ることです。聖霊降臨後の最初の説教でペトロは、聖霊の降臨は、預言者ヨエルによって言われていたことの実現だといって、次の言葉を引いています。

神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。・・・（使徒言行録二・一七、ヨエル三・一）。

この預言者の言葉に代表されるように、イスラエルでは、終わりの時に、神の霊が救い主に注がれ、さらにすべての人に注がれて、新しい時代が来ると信じられていたのです。

神の霊は、すでにイエス・キリストに注がれました。その聖霊が、いまや「すべての人に」注がれます。すべての人に、若者にも老人にも、僕にも、はしためにも、すべての人です。このヨエルの預言がここで起こっているのだと、ペトロはいうわけです。聖霊降臨の出来事はこうして何か不思議な事件というのではなくて、神の救いの計画の一部、その前進なのです。

聖霊降臨によって、救いの歴史に最終段階の画期がもたらされます。神の民、教会が形成されます。宣教がなされます。教会の宣教は人々に救いをもたらします。また重い責任も与えられています（マタイ一六・一九、ヨハネ二〇・二三）。この神の救いに、私どもあずかります。あずかるだけではない、その前進のために召し出されます。今日はそれを思い起こす日でありたいと思うのです。

2　神の恵みの選び

さて今日、聖霊降臨祭に、私どもに与えられた聖書は、エフェソの信徒への手紙第一章です。

ここに神の救いの歴史が、そこに召し出されている私どものことが、一気に、息もつがせず、記されています。

いま〈神の救いの歴史、それに私どもあずかっている、あずかっているだけでなくてその働きへと召し出されている、そのことを、この聖霊降臨祭、私ども思い起こすべきだ〉と申しましたが、今日の聖書箇所は、それを私どもの栄誉として、また恵みとして明らかにしています。

神の救いの歴史の中で、私どもは、いったいどういう存在なのだろう、何者なのだろう、それが、私どもの問いです。それは、私ども人間の、ふだんは隠れている、人生の根本的な問いです。

今日のこのまことに格調高い箇所で、パウロは、神の救いの中にある人間を、選びから理解しています。

天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです（四～六節）。

この最初の言葉にあるように、パウロはここで、人間を、神の救いの中にある人間

を、神の選びから理解することをしています。別の言い方をすれば、自分の人生の基礎を、はっきりと神の選びにおいています。

ふつう私どもはそんなふうには考えないものです。あらゆる人間的な偶然が重なっていまここにこうしているのであって、必然なんて、そこには少しもないと考えています。

パウロはそうではありません。神に選ばれてここにあると考えています。なぜそう考えるのでしょうか。それは、自分の中に、神に選ばれるに値するものが何かあるからではありません。

そうではなくて、私の中に、神に選ばれるに値するものが何もないからです。ないどころか、捨てられるに値するものは、私の中にはいっぱいあります。

しかしそれでも、神に召され、いま神の前で歩むことが許されているのが事実だとすれば、その理由は、自分の中にないことになります。自分の外にしかないことになります。すなわち、選んだ神の側にしかないのです。私どもの選び、それは、ただ、神の恵みの選びというほかはないのです。

神の側に選びの理由があるのだとしたら、それは天地創造以前でもよいことになるのではないでしょうか。パウロはそれを神の愛のゆえに、といい、「キリストにおいてお選びになった」といっています。

選びに基礎をおく人生、パウロは、その私どもを、神がどうなさろうとしているかもここに書いています。

キリストにおいてお選びになった神は、私どもを神の子キリストと同じ身分のものに、すなわち、神のもの、神の子としようとして「前もって定められた」と書いています。

何のためにでしょうか？　「恵みを、わたしたちがたたえるため」。ここに、神の選びの目的があります。神が、値しない者を選び、神の子と定め、神の救いの歴史の中に置いてくださる理由があるのです。神の恵みをたたえるため、これが、パウロの教える、すべての人間の人生の目標です。

3　神の栄光のために

選びに基礎を置く人生、その始まりを、いま少し見て見ました。この人生を、神はイエス・キリストのみわざによって、どのように導いてくださるのかについても、今日の箇所に記されています。七～一〇節です。ただ今日は、残念ながら、省略せざるをえません。

そこで、そのような神の救いの歴史に、私ども、どのようにしてあずかることになるのか、それを確認したいと思います。

あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞きそして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです（一三～一四節）。

「約束された聖霊で証印を押された」というのは洗礼のことです。洗礼によって私ども神の救いにあずかるのです。

この箇所の冒頭、「あなたがた」とは、エフェソの信徒のことですが、彼らは異邦人なので、ユダヤ人とはちがって、まさに洗礼によって神の救いにあずかるのだということが、いわれています。

選びに基礎を置く人生、私どももこの人生をもって、神の救いの前進にあずかるよう召されていることです。私どもも、異邦人であるエフェソの信徒と同じく、洗礼によってそれに参与するのです。

洗礼のことを、ここで簡単にただ洗礼といわずに、「約束された聖霊で証印を押された」といっています。たんなる言葉の綾（あや）ではなく、そういわざるをえなかったのだと思います。

聖書は、キリスト者に、水による洗礼とともに、聖霊が与えられると約束しております。聖霊の証印を押す、封印する、というのは、聖霊をもって、神が、この人は自分の所有であると、はっきりさせることです。またその与えられた聖霊は、手付金として、未来を先取りしつつ、将来を保証するといわれています。私どもは神の国を相続人です。

さて今日は、聖霊降臨祭です。はじめに申し上げたように、この日は、神の救いの歴史の大きな区切りを意味します。神学的には、いまは、聖霊の時代といっていいかも知れません。

しかし私ども、この聖霊は、イエス・キリストの霊をあることを、片時も忘れてはなりません。キリストの霊として、それは御言葉の霊です。キリストを離れて、御言葉を離れて、霊が一人歩きしてはならないのです。聖霊は御言葉の力にほかなりません。そのようなものとしてそれは、私どもを教え、慰め、信仰へと導く力です。聖霊のもとに教会は置かれます。「われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり・・・」と使徒信条が告白している通りです。教会は、御言葉の力としての聖霊のご支配のもとに置かれています。

教会にあって、私どもも、一人ひとりが、このキリストの霊、御言葉の霊に生かされたいものです。そのとき、私どもの生活は、神の栄光をたたえるものに変えられていくほかないのです。

さて今日の箇所、もっとも印象深いのは、パウロが神の選びに人生の土台を置いたことです。これはすでに申し上げました。

それと並んで印象深いのは〈神の栄光をたたえるため〉という言葉です（六、一二、一四節）。この言葉によって、神は私どもに何を望んでいるかを、明らかにしています。神の選びの目的といってもいいと思います。こうして今日の箇所は〈神の栄光をあらわすため〉という私どもの人生の目標を、最後に示して終わっています。

音楽家の有名なバッハも、ご承知のように、自分の作品の終わりに、〈ただ神にのみ栄光あれ〉と書きそえたことは有名です。私ども、取るに足りない僕（ルカ一七・一〇）ですけれど、それでも〈神の栄光のために〉、この一途な思いをもって主に従っていきたいものです。

（六月五日、聖霊降臨祭）